

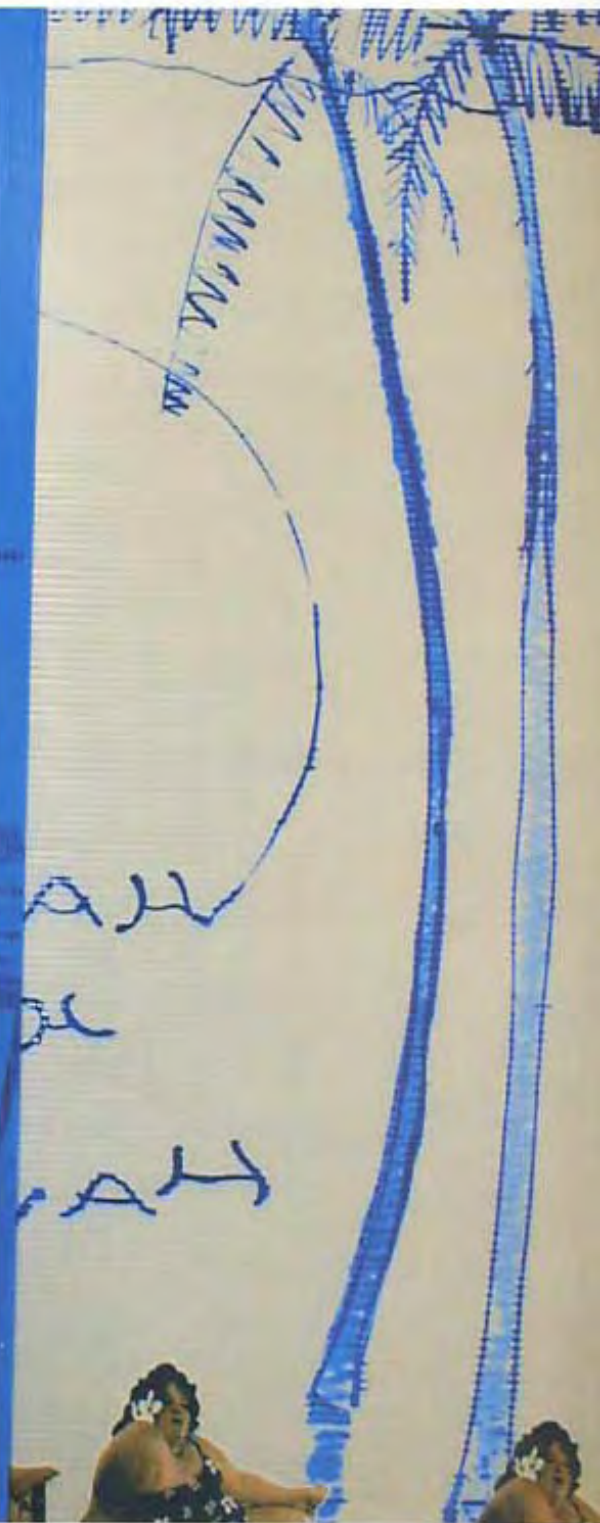
# 六 花

俳句雑誌

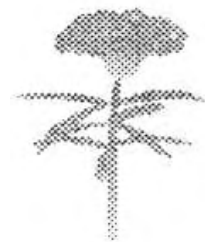
りつか

10

*designed by Tamako Tanaka*



訪  
戴



山田六甲

夕畠や瓜の据ゑ膳食はぬなり  
城へゆく道途切れけり男郎花  
野分して左右の耳を盗られけり  
梨冷やす子供のころは皮もたべ  
下手くそな吹き方をして芋嵐

平凡で陳腐に秋刀魚焼き上がる  
陰の神男根の神月祀る  
指のとげ齒でぬいてゐる夜長かな  
芋嵐芋をあらして行きにけり  
一本の竹にもどりし案山子かな  
ひと揺すりふた揺すりして案山子抜く  
月代や空気のやうな句を待つて  
唐辛子うきうきとして流れゆく

無鑑査同人作品

六  
卿  
集

(五十頁送り)

木斛の花

二瓶 洋子

雨音の止みて再び雨蛙

半眼の憂ひめきたる墓

芙美子忌や厨俳句と言はれても

雲透けて涼しき風の吹き抜ける

木斛の花北限の庭に咲く

長月のの  
松山律子

長月の眠ればあした来るだるか  
衝突入に当たり障りのない言葉  
滝から落ちる水のように嗚咽  
蓑虫や人間は神の抜け殻か  
この海に塩まいてゆくかりがねか

リムジン  
小田元

てふてふの足りない野外音楽会  
ひまはりに取り囲まれしログハウス  
日本は赤く塗られて夏入日  
夏の空ロールペーパー浮いてをり  
リムジン洗ふホース捻ぢれて虹立てり

なでしこ

浦玲良子

穀象に七つの海のありにけり  
京風鈴ときをり声を詰まらせる  
葎切がやいのやいのと水車  
早苗饗の景品モカのキャミソール  
撫子の思ひつめたる目が真つ赤

水中花

木内美保子

溜息か泡ぷくぷくと水中花  
一杓に己が顔汲む山清水  
絹の帯の夢の字透けて喪の主演  
サングラスかけて心をかくしけり  
潮の香を溜めて日傘をたゝみけり

蹴飛ばし

中村 房枝

知命など蹴飛ばして過ぎ唐辛子  
濡れ足の猫抱き上ぐる草の花  
石榴の実内々だけの葬りにて  
木のどれもこれもずん胴雁渡し  
ひとりごと言うて寝につく良夜かな

枇 杷

鳴海 清美

枝折戸の替へられてをり竹酔日  
枇杷剥いて中途半端な日の終る  
蛇苺そこより奥に踏みこめず  
凶の日のアイスコーヒー胃に沁みる  
人の住む気配のなくて青簾

# 万緑や泣きながら私を生んだか ことり

正座する国に生まれて沙羅の花

子宮でも浮かんでみたわ舟遊び

ちぎれたる翅あり夏は死の季節

梔子に取り囲まれる私の墓

母は泣きながら自分を産んだから  
このような疎ましい性格になったの  
か、というのが哀しいが母への恨み  
節ではない切なさが籠もっている  
し、ことり俳句の新しい方向を示し  
ているのではないか。

掲句は月一千を超える作句の中か  
ら五句に削って投句したという。沢  
山作れば良いと言うわけではない  
が、努力は結果を裏切らない。



# 檀木集

千円札

松本文一郎

梅雨寒や千円札の葉あり  
梅雨じめりツボを外れたるお灸かな  
閑古鳥妻と並びて足湯かな  
春蚊打っ口裏合せ頷きぬ  
父と子の会話少なく遠青嶺

芝生

松下幸恵

梅雨晴間芝生の上でネコながし  
ぼたん咲く南京町のあかり燃ゆ  
戸のきしみ額あぢさゐの今一つ  
梅雨晴間山肌見ゆるイカリ山  
煮だえると祖母の云つてた暑さかな

夏山

三井孝子

原色の屋根が似合へり夏木立  
せせらぎや避暑地の木々の葉の大き  
解されし心が遊ぶ夏の山  
風に髪遊ばせ夏のスキー場  
夏山を振り返りつつ下山する

# 菜根譚



石垣の乾かぬ石や梅雨晴れ間

市川伊團次

夢風撰候補だった句。石垣は一体に水はけの良い構造物なのだが、その中にはどうしても乾かぬ石があるという発見は鋭い。だがこの句には「梅雨晴れ間」に欠点があるのだ。原因と結果が明らかなので、句の底が浅くなる。それよりも梅雨が晴れてからのちも乾かぬ石垣の石であつたら文句なしで夢風撰に推薦しただろう。かといって「梅雨明けの」とかは余計にいけない。何年か推敲して熟成を待つことだ。

五月晴健康手帳に句を記す

岩松 八重

健康手帳は六五歳からもらえると聞く。医療費負担の割引やさまざまな割引などがあるという。その大切な？健康手帳の余白に句を書き入れた。いつもなら俳句手帖かノート、筆記用具はいつも持ち歩いているけれど、句の名案が浮かんで書き留めようとしたら、生憎句帳が見あたらない。その時俳人はどういうことを思いつくかという、掲句のような行動に走る。手帖が汚れるとか、使えなくなるかもしれないとか考えるうちは本物の俳人にはほど遠いのかも。(以下略)

梅雨寒や千円札の葉あり

松本文一郎

梅雨寒は「梅雨のさなか、北からの寒気団が南の温暖前線を再び追いやって、すっぱりと日本を覆うと、にわか冷雨となる」(『日本大歳時記』・飯田龍太)梅雨寒の休日などは屋内で無聊を託つわけなのだが、作者が本を開くと千円が出てきたという明解な句意。千円札を葉に使うのはまことに贅沢なことであるが、お札を使ってでも葉っておきたい読みどころだっただろう。だが、作者はそのことをすっかり忘れていたというユーモアを含んでいる。

# 六花集



## 六甲選

浜田久美子

わかやぎすずめ

菊谷 潔

アロハシャツ珊瑚の海を夢に見て

空梅雨や私の涙あげようか

連絡を待つだけの日々青嵐

懐かしき香水の香に振り向きぬ

若葉燃ゆ命の重さ量りたし

平居 滯子

文だけの淡き交はり水中花

いつまでも貴方の娘桜桃忌

風鈴の音掴まへに幼き手

片蔭を母のスカート握る子も

用途別いくつもそろふ夏帽子

伊予訛飛び出して来し鮎の膳

濃く淡く乱れ模様の青田かな

夏の月わたしの為に出たまふか

涼しさや演奏会の中の島

夏の宵誓ひの曲のアンコール

夏草や道のしだいに煮え詰まる

山路の風待ちちてをり雨安吾

この暑さ団扇簾も間にあはず

草むしる背にふりそそぐ蝉しぐれ

蝉時雨笠より団扇手放せず

横山 迪子

雨憎くや逢瀬重ぬる天の河

こころもとなや鵲の橋に雲

七夕や逢ひたき人の名は書かず

星まつり猫の名前も短冊に

星まつり恋を恋するお年ごろ